環境文明社会づくりあれこれ(23)

加藤　三郎

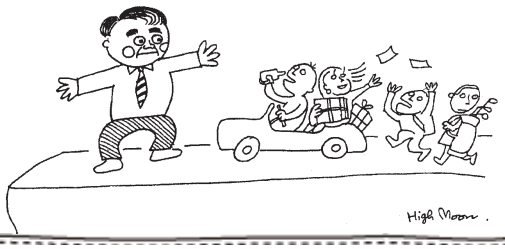
源流（23）

多くの環境庁長官がそうであったように、石原慎太郎長官も1年で交替してしまったので、彼の意思を反映した“アメニティ行政”は実施できないで終わってしまった。

一方、パリなど欧州諸都市を沢山見てきた私の目には、東京はじめ日本の都市の姿は、都市計画の不全さと、電線、電柱、広告などによる雑然さと、混乱そのものに映っていたので、OECD事務局レポートが指摘していた日本の都市環境のアメニティ欠如ぶりは痛いほど理解していた。

そこでまず私は、庁内の若手有志に働きかけて研究会を立ち上げた。そして、OECDの日本環境レビューの経緯や意義、その中でアメニティについて指摘があることなどを多くの人に知ってもらうために、前にも紹介した「OECD東京会合からの試論」を『公害と対策』の77年2月号に掲載した。

その中で、ロンドン留学中の夏目漱石が家族に送った書簡に「当地には桜といふものなく春になっても物足らぬ心地に候。且つ大抵は無風流なる事物と人間のみにて雅と申す趣も無之、文明がかくの如きものならば野蛮の方が却って面白く候。鉄道の音、汽車の烟、馬車の響き、脳病杯ある人は一日も倫敦には住がたかるべきかと思はれ候。」とあるのを引用し、当時のロンドンの汚染状況に比べ、江戸、明治期の日本の快適性を懐かしんでいることに触れた。これについて一言付け加えると、石原長官はこの引用文をどこかで見たらしく、「君が引用している漱石の文章の出典は何だ」と尋ねられたことも今思い出す。

私のアメニティ挑戦の第二弾は、朝日新聞の「論壇」（78年10月14日付）に「電線を地下に埋めようー美しく安全な都市を造るために」と題し、空中に露出した電線や狭い道路に立ちふさがる電柱、質の悪い広告物などは美観障害だけではなく、歩行者の安全を脅かし、大地震、台風などの災害時には災厄となるので、電線、電柱を計画的に地下に埋設すべき旨、提言した。するとその日のうちに、電力会社の担当者が数人、私（当時は交通公害対策室長）のところに押しかけてきて、コストがかかる、時間がかかる、電線を地下に埋めたら停電の時、どこに故障があるのか見つけにくいなどの「出来ない理由」を繰り返し説明された。

後年、温暖化対策として太陽光、風力などの再生可能エネルギー開発の重要性を私たちが強く主張していた時（大震災前）には、電力関係者は「ソーラーは夜になったら発電しない、風力は風が止んだら発電しない不安定電源。山手線内側すべてに太陽光パネルを敷き詰めても原発一基にかなわない」など、再生可能エネルギー発電の“欠陥”を強調した。以前と同様に、ここでも「出来ない理由」を繰り返し宣伝するのを聞いた時、まだ懲りずに「素人だまし」を続けているのかとあきれてしまった。そして今日もこの手のやり口で、石炭火力にアンモニアを混焼又はアンモニア専焼するなどの「革新」技術で脱炭素社会に貢献しますとの言説を政治家も振りまいているのは残念というより、日本の健全で持続可能な電力体系を築く上でも危険だと私たちは考えている。